



医療法人近森会

発行 ● 2007年5月25日

www.chikamori.com
www.近森病院.com

〒780-8522 高知市大川筋一丁目 1-16 tel.088-822-5231 fax.088-872-3059 発行者 ● 近森正幸 / 事務局 ● 川添昇

びるっば 6

Vol.251

ERの新たな挑戦

ドクターヘリ・ドクターカー運用

近森病院 ER診療部長 根岸正敏

近森病院の最近の救急車搬入件数は年間 5,200 件前後です。高知県の救急医療体制は、医師数は全国的にも多い反面、都市部に集中しているために東西に長い特殊な地形を有する本県ではとくに県東部、西部では医師不足、救急対応可能な医療機関の減少が大きな問題になっています。

近森病院 ER では、これまで「いつでも、だれでも、どんな病気でも」をモットーに運営してまいりましたが、救急専従医師 1 名で限界もありました。

2007 年 4 月より群馬大学から井原先生が加わり、さらに 6 月から竹内先生が着任予定で、救急専従医師 3 名体制になります。これに伴い充実した救

急医療体制を目指し新たな取り組みを開始しております。

①一つは、ドクターヘリ、ドクターカーの運用です。これまで当院 ER では県内全域から救急患者さんの受け入れを行ってきました。とくに遠方地域では、各消防救急車と当院救急車での中継搬送を行ってきました。しかしその対応は十分とはいえず、必ずしも医師の同乗はできませんでしたが、**6 月より医師同乗によるドクターカーの運用を開始**することになりました。ドクターカーは遠方地域からの中継搬送のみならず、近隣地区の医療機関からの重症患者さんの受け入れ、さ

していること自体に驚く。

年金流用問題や情報の流失、年金不正免除の問題など社保庁をめぐる不正や失態の数々が出ていて、社保庁自体の解体問題まで発展しているが、それも仕方がないと思わせる「手続き」の「通知(お知らせではない)」である。年金は国民が自ら働いて得た所得から捻出して預けてある保険であるが、なにか社保庁自身が年金を国民に支払ってやっているように勘違いしているのではないか。

申請すれば 60 歳から「老齢基礎年金」を受け取ることができるのだが、申請をしなくてもいいのかどうか、受け取った場合はその後の年金は減らされるのかどうか、皆目分からない。だから、それぞれの文章に「お問い合わせください」の一文が添えられている。つまり読んだだけでは分からないだろうから問い合わせる、と。なんと失礼で、しかも無駄なことをしているのかと呆れてしまった。理事長・ちかもり まさゆき

▼中央にドクターヘリの運用訓練中の根岸正敏 ER 部長



▼神戸での DMAT 講習で優秀な成績を収め、隊員 5 名が表彰された。表彰式を兼ねた懇親会で、左から北村医事課長補佐、根岸部長、西本研修医。後ろは国立病院機構災害医療センター救命救急センターの本間正人部長。その前に山崎主任 Ns、村田主任 Ns。後ろに井原 Dr、高知赤十字病院の西山謹吾部長。一番右に兵庫県災害医療センターの小澤修一センター長



らに要請があれば災害現場などへの直接出動も考えております。

さらに搬送時間の短縮が必要な重症患者さんについては、**近隣のヘリポートを利用したピックアップ式のドクターヘリの運用を計画**中で、現在整備点検中の高知県防災ヘリ「りょうま」の復帰にあわせて 7 月を目途に運用を開始する予定です。

②もう一つは、**災害医療に対する対応の強化**です。南海沖地震、それに伴う津波が近い将来に起こる可能性が極めて高いと考えられています。県内の医療機関が壊滅的ダメージを受ければ、全国各地からの医療支援を受けなければなりません。県内でもきちんとした災害医療体制の構築が必要です。**2 年前から厚生労働省が認めた専門的な訓練を受けた DMAT(Disaster Medical Assistance Team) が編成される**ようになりました。災害の急性期(概ね 48 時間以内)に活動できる機動性を持った、**専門的訓練を受けた災害派遣医療チーム**であり、被災現場での医療活動のみならず、災害支援病院での応援活動、被災地内での対応可能範囲を超えた重症患者さんを他の非被災地域の医療機関へと航空搬送する広域搬送支援、さらには JR 脱線事故でも話題になった直接救出現場へ出向いての**※次頁へ**

年金の通知



近森 正幸

この 5 月上旬に「年金の手続きをされるみなさまへ」という社会保険庁からの通知書類が届いた。

年金をもらえるような歳になったのかと、まずショックを受けた。まだまだ若いと、心の片隅に仕舞い込んでいた実年齢を、目の前に突きつけられた思いがした。

書類を読んで、こんどは無性に腹が立ってきた。旧態然として判読しにくいお役所の文章が並んでいる。年金といえば定年を迎えた国民にとっては大きなよりどころで、それをこんな難解な文章で送りつけてくる役所が、未だにこの世の中に存在

※前頁より「瓦礫の下の医療」などを行います。DMAT 隊はさまざまな状況、指揮下で他の DMAT 隊との連携を図りながら活動を行う訓練を受けており、一定水準の急性期災害医療活動が可能です。

当院も本年 4 月に神戸での DMAT 講習を受け、試験でも優秀な成績をおさ

め、隊員 5 名全員が表彰されました。こうして県内 4 番目の DMAT 施設となり、いつでも出動可能な体制がとれるようになります。

今後もさらに、地域救急医療、災害時の救急医療体制を充実させていきたいと考えています。

第 17 回 近森会クリニカルパス大会

クリニカルパスによる地域貢献

テーマは、脳内出血のパス 2007 年 5 月 12 日、コンフォートホテルで
脳神経外科科長 大谷敏幸



前列左から順に、大谷敏幸（脳神経外科科長）、古田博美（検査技師）、片岡真一（泌尿器科科長）、高橋潔（脳神経外科部長/パス委員長）、野本真紀（薬剤師）、西山明恵（看護師）、山本靖代（主任看護師）、その後ろに前田英武（ソーシャルワーカー）、そのすぐ前に平田絢子（看護師）、右横に橋川恵子（理学療法士）、その後ろに細川忠（主任作業療法士）、続いて横へ山崎恵美（医事課）、内山里美（主任管理栄養士）、尾知美穂（看護師長）。右端には外部講師としてお迎えした近森美智子先生（高知県社会保険事務局看護指導官）

今回の参加者は院内 174 名、院外 92 名、総参加者数は 266 名と盛況のなか行われました。

前半は疾患の説明が脳神経外科の高橋潔部長より行われ、その後初回のパスと今回検討された改訂版のパスとの相違についての解説がありました。

ついで運用方法について病棟看護師、ER 看護師、検査技師、理学療法士、作業療法士、管理栄養士、薬剤師より説明が行われました。

続いて近森リハビリテーション病院小笠原貞信医師より連携パスの進捗状況が報告され、その後全体的な質疑応答となりました。

後半は高知県社会保険事務局看護指

導官近森美智子様より「医療機能評価を受審する意味」と題しての講演を拝聴し、ついで医事課より医療費の説明、医療相談室より脳神経外科の医療相談の現状についての説明がありました。

ベンチマーキングは脳神経外科大谷が説明し、他の病院のパスと比較により当院のパスの特色を説明しました。当院の脳内出血のパスはチーム医療や患者さん中心の医療という点で優れており、効率的に運用されています。しかし細かい点について改善すべきことが多々あり、パス大会において詳細に検討することの重要性を認識しました。さらに地域に貢献できるよう努力を継続していきたいと思えます。

医療安全シリーズ⑥

医療安全担当看護師長 青木千利

見えない苦情

ホテルにチェックインすると、ベッドカバーの色や洗面台の備品を確認するのも楽しみのひとつである。そして、ベッドサイドには「清掃担当者は〇〇です。何かお気づきの点がありましたら、ご遠慮なくお書き下さい」のメッセージカードが置かれている。

サービス向上への具体的な取り組みが伺え、つい嬉しくなっており短いコメントを書いたりもする。

この春に連泊した 2 日目の朝、「今夜もお世話になりますので、シーツ交換は結構です」のメッセージを残し部屋を出た。夕方帰り、乳児に添い寝した跡のようなシーツの乱れには「フッ」と笑ってしまった。ところが、チリ箱の中や浴槽に掛けていた使用済みのタオル類もそのままの状態であったのには愕然となった。

清掃マニュアルの中に、シーツ交換と部屋の掃除は一緒に入っていたのかも知れない。どちらかが無しであれば、ひっくるめて無しとなったのか。

医療安全の仕事をしていると、ヒヤリ・ハット報告書の中でよく似たケースを目にすることがある。しかし、このように報告書として或いは苦情のご意見として表れているのは、ほんの僅かな割合であることを自覚しなければならない。多忙な業務を理由に煩雑になりがちな日頃の言動を顧みたいものです。



聴診器

私にも息子にも「ばあちゃんの愛」

近森リハ病院 4 階西病棟

看護師長

寺山みのり

もあった。

遠足に作ってくれる、小さくて可愛い色とりどりの海苔巻弁当は、特別な日の思い出となった。腰が曲がり、脚を引きずりながらシルバーカーで歩くようになって、私たちに菓子やアイスクリームを買ってくるのが彼女の楽しみだった。私の母は「孫の面倒をみる老後は嫌だ」と言ってきた。しかしながら、私も母と同じ道を歩んでいる。そして、息子は「のんびり母さんは嫌。おばあちゃんとお風呂に入る。おばあちゃんは何をやっても天才や!」とおばあちゃん（私の母）を絶賛する。



▲ばあちゃん、みのり。セピア色のアルバム (Vol.2) には「1 歳半の頃、成長がはやい。どんな会話でも出来る」と母の説明書きがついている

今春、小学生になった息子が一人で登校する朝、私は神棚のばあちゃんに「お願いね」と頼んだ。私のばあちゃんは、私の息子の 4 歳の誕生日の前日、我が家で亡くなった。息子は、畳の上で眠るばあちゃんの顔を何度も覗き、誕生日を母のケーキで祝った。

私の母は看護婦だったから、私と妹の傍にはいつもばあちゃん（息子には曾ばあちゃん）がいた。五右衛門風呂のかわりにタライで風呂に入れてもらったり、寝床に小さな机をひろげて食事をしたりと、ばあちゃん流の子育てが、ママゴトみたいで楽しく



合格証

氏名 葛籠 幸栄
生年月日 昭和 年 月 日あなたは、労働安全衛生法第八十三条の
規定によって実施した平成十八年度
労働衛生コンサルタント試験（保健衛生）
に合格したことを証します。

平成十九年三月二十三日

厚生労働大臣

柳澤 伯夫

労働衛生
コンサルタント
の資格を取得

糖尿病内分泌代謝内科・葛籠幸栄科長の挑戦

戦後の高度経済成長期を経て以来、日本はずいぶん豊かになったが、一方で劣悪な労働条件に曝されながら繁栄を底支えてきた労働者をめぐる問題も長い間の課題となってきた。

そんな社会情勢を背景に、例えば労働基準法が制定され、あるいは産業医や労働衛生コンサルタントといった概念も登場してきた。

糖尿病内分泌代謝内科の葛籠幸栄科長が、合格率わずか30%しかない「医学・労働衛生面から職場の衛生環境をサポートする労働衛生コンサルタント」の資格試験への挑戦を思い立ったのは、全国的にも資格取得者が極めて少ないという情報を「ちらっと耳にした」のがきっかけだった。（※日本労働安全衛生コンサルタント会高知支部所属の衛生コンサルタントの医師は2名）。

一度目の挑戦、しかもこの若さで見事合格。すると、この資格一つで開業ができるほどの効力があると聞き、葛籠科長自身も思わず肩に力が入ったようだ。

葛籠科長の夢はいま大きく羽ばたいている。「まだまだ駆け出しですけど…」と身体を小さくして恐縮しつつ「この資格により産業医とはまた別の観点から労働環境や労働者への提案、並びに改善のお手伝いができる、そのスタート地点に立てたことを、素直に喜んでいきます」と嬉しそうだ。

近森会の治療医学と在宅医療の大きな二本柱に、今後は予防医学の柱も立つことを夢見つつ、そういう近森会の柱の「小さな一翼を自分が担えたら、とっってもやり甲斐を感じます」と、控えめながらきっぱりしている。

産業医の北村龍彦副院長を中心に健康管理センターの活動が活発な近森会にあって、「予防医学の観点を取り入れつつ労働衛生コンサルタントならばこそできることがあるのではと、コツコツ探していきたいです。皆さん、お

気づきの点など何でもおっしゃってくださいねー！」と、あくまで

低姿勢だ。葛籠科長の夢が大きく花開くことで、高知県内の労働環境もますます

明るく方向に向かうに違いない。葛籠科長よろしくお願ひいたします。

厚生労働大臣の名前で出された平成18年度の労働衛生コンサルタント試験（保健衛生）の合格証。第百六号とある。全国でわずかに百六番目の合格者！ということになる

院外エッセイ

お多福のリベンジ

自称「声の便利屋」 隅田 ゆき

1957年佐川町斗賀野生まれ。RKC・RNCラジオ番組パーソナリティを経て「声の便利屋さん」として冠婚葬祭、イベント、選挙、人形劇、ライブハウス、CM、ナレーションなど様々な現場で活躍中。



長男が五歳のとき。オモチャの小さな鉄砲玉を耳の中に詰め込んでしまった。私がピンセットで取ろうとしても奥へ奥へと入り込むだけで、息子は「痛い」とぐずり出すし、タイミング悪く日曜日だったので、休日外来の、馴染みの無い病院へ駆け込んだ。

待ち合いで座っていると看護婦（当時の呼び名）さんが、「まあ、だいぶ腫れましたねえ」と痛々しそうに長男の顔を覗き込んだ。

「えっ！」と耳を見つめる私に、「おたふく風邪ですね。私は驚いて「そうなんですか？」と聞き返した。

看護婦さんは婦長さんと呼んで来た。婦長さんは長男の顔を見るなり「お母さん、分かりませんか？こんなに腫れているのに！」と私を責めるような口調で「おたふく風邪」を断言した。

私はオロオロと長男の顔を見つめた。どこがどう腫れているのかさっぱり分からない。しかし、おたふく風邪なら今日こうして病院に来たのは本当にラッキーなことだったと、耳の中の鉄砲玉に感謝すらした。

そして名前が呼ばれ診察室へ。「先

生、おたふく風邪ですよ」と確認する婦長さんに、「ああ、そうだね」と応えるお医者様。そして両手を長男の丸いほっぺの下に当てて、少し首をひねってからボソッと。「あ、こりゃおたふく風邪じゃない。これは……こんな顔や」。

『風邪ではないけど、おたふく顔』の幼児の母親として私はムカついた。が、お医者様は私に文句を言わせぬ早技で、長男の耳から小さな鉄砲玉を2個取り出してくれたし、婦長さんも顔をそむけたまま送り出してくれたので、何も言えぬままモヤモヤ気分で帰宅した。

あれから15年……。大学生となっても長男の顔はおたふくのまま、わずか20歳でメタボリック症候群と診断された。それにも懲りず、バイト先のスーパーの売れ残り食品をたらふく食っているらしい。「こんな顔」のままの長男の健康を案じつつ、いつかあの病院に、スラリとイケメンに成長した長男を連れてリベンジしたいものだ、と夢見ている。

医事課課長補佐 北村 昌久

早いもので、近森病院に入職して、間もなく6年が経ちます。この6年間で、近森病院、特に医事課に関しては、電算レセプト、DPC(疾患別一日定額包括払い制度)、電子カルテ等の導入があり様々な変化がありました。その中で、個人的にも診療情報管理士、心肺蘇生(一時救命処置)、DMAT(災害医療派遣チーム)等の資格取得への参加もさせていただきました。業務としては治療費の支払について主に行ってききましたが、退院の際に患者様よりお聞きした感謝の言葉、ご指摘などを今後の励みまた課題としてがんばっていこうと思っております。まだまだ、知識、経験等不足しておりますが、患者様への質の高い医療の提供のサポート役として、今までに研修させていただいたことも含めて自己研鑽していきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

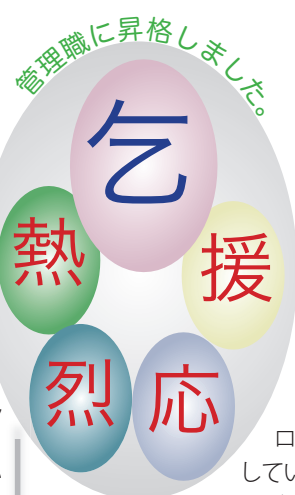


障害者相談支援センターちかもり主任
林 恵



近森に就職して10年が経ちました。学生時代実習でソーシャルワーカーの面白さを教えてもらい、就職してからは先輩方の背中を見て、自分もあんな風になりたいと憧れたのをいまでも憶えています。そんな諸先輩方のように福祉部で、病院で、地域で潤滑油のようになれたらと思います。

いま、「障害者相談支援センターちかもり」は2年目を迎えました。今後はさらに、地域で生き生きと暮らすには何が必要か、フォーミュラインフォーマルを問わず広い視野で、その人に沿った生活スタイルを、相談者と一緒に考えて活動していきたいと考えていますので、ご指導よろしくお願いいたします。



私の趣味のひとつは「高知で旬の海の幸、山の幸そして土佐酒」を味わうことです。高知にUターンしてきて感動した旬の味覚を挙げると、早春は葉わさびの浅漬け、さくらの咲く季節には浜あざみの天麩羅。そしてこれからの夏は、なんといっても新子の刺身です。

さてこの度、近森会に入職して期間の短い「新子」のような私が、主任を拝命しました。これから「新子」のようなみずみずしい感性や視点で、「ヨコ」の仕事ができるようチャレンジしていきたいと思っています。今後ともご指導ご鞭撻のほどお願い申し上げます。

新子とはクロマグロの子どものことです。高知では、クロマグロを魚体の小さい頃に成長するにつれ、新子→ヨコ(ヨコワ)→マグロと呼び習わしています。20cm

くらいの子供ですがスダチか仏手柑の皮をすったものをふりかけていただくと、さすがいしい香りのみずみずしい食感で身体の中から活力が湧いてくる感じがします。



古茂田不二写真教室での撮影実習作品からお気に入りの一枚で、撮影は長尾進一郎 CE

施設用度課主任 窪田 清文



資料とただただ格闘中の日々です……。自分の未熟さゆえに多くのスタッフに助けられることが未だ多くありますが、これからは主任としての自覚や職務の重さをしっかり受け止め、よりよい医療提供の環境作りができるよう、またスタッフの期待に応えられるようがんばりたいと思います。よろしくお願いいたします。

思い起こせば早9年! 独身で就職し、今や一児の父になりました。気のせいかお腹まわりにもずいぶん貫禄がついてしまいました。本当にあっという間に過ぎてしまったように思います。仕事の方もあっという間に片付けられるといいのですが、机の上に山積みになった

ハッスル研修医・第1回

研修医として働き始めてあっという間にGWが終わりました。大学の学生としての実習とは違い一人の医師として患者様と接していますが、私自身の知識不足、技術不足など痛感しながら、指導医の先生の後ろをヒヨコのように付いて回っている毎日です。指導医の先生方にはお忙しい中、貴重な時間を割いていただいてもなかなか仕事を覚えることもできず迷惑の掛け通しです。色々な方と接する中で自分自身を成長させ、子どもの頃、心に抱いた理想の医師像をもう一度思い出し初心に戻り頑張っていこうと思っています。

まだまだこれからの研修ですが、長いようで短い2年の間にひとつでも多くのことを学びたいと思っています。どうか



初心

内科研修医
山本康世

温かい目で見守っててください。各科の諸先生方、コメディカルの方にはこれからたくさんご迷惑をおかけすると思いますが、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

地域活動支援センターこうち

始動!

医療福祉部 地域活動支援センターこうち 主任

川竹 亜子

▼週に一度程度は、こんな風に場所を町なかの喫茶店に移して、「地域活動支援センターこうち」のメンバーさんと担当ソーシャルワーカー（SW）が打ち合わせを行なっている

平成11年5月に開所した地域生活支援センターこうちが、このたび「地域活動支援センターこうち」として、新たに活動を始めます。障害者自立支援法のスタートによって、障害のある方により身近で使いやすいサービスの提供が求められており、私たちも新たな活動を展開していくことになったのです。具体的には、

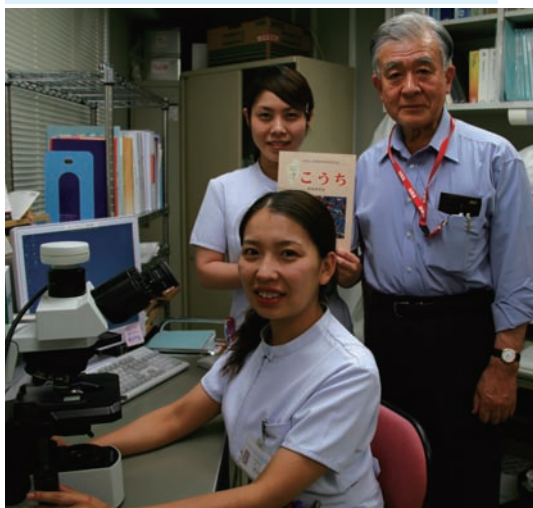
- ①障害福祉サービスの利用申請窓口を当センターが担うことになりました。
- ②当センターの相談機能をより強化し、精神障害のある方の生活問題に積極的に関わり、関係機関と連携しながら、問題解決を図っていきます。
- ③地域住民と精神障害のある方々が自然に融合できるような活動を計画中。



以上のようなことを踏まえ、障害のある方々が、地域で安心して生活できるための拠点として、色々な人々と手を結びながら、「あったかい地域づくり」に取り組んでいきたいと思っています。

皆さま、今後とも新しい「地域活動支援センターこうち」をご支援ください。

学術奨励賞 をいただきました。



ご協力に感謝
致します

高知県臨床検査技師会の学会誌に投稿した論文「逆行性腎盂造影時の左尿管洗浄液中に腺癌細胞を認めた直腸原発、左尿管転移癌の一例」で「学術上の価値がある」と認められ、学術奨励賞を受賞した臨床検査部の皆さん。論文の指導は病理部長の円山英昭先生。中心となって研究に励んだ橘知佐さん(手前)と、ともに研究した弘松慶子さん。学会誌を手元に病理検査室で記念撮影

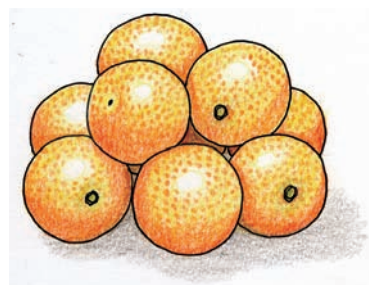
橘知佐さんを中心に、細胞診の検査結果を報告した論文が「学術上の価値がある」と認められ、このたび学術奨励賞を受賞した。これは、当初、研究会での7分間の発表内容が評価され、学会誌への投稿を依頼されたもので、いわば二段階の選考結果ということになる。

この4月から細胞検査士として本格

的な任務に就いている橘さんは、「学会発表にガバッと肉付けをしたんですが、円山先生のおかげで、賞にも結びつきました。励みになります」と嬉しそうに話している。

病理部長の円山先生は「賞は、最前線のスタッフにとってもいい刺激であり、励みとなるでしょう。今後とも、患者さんにとっての最善、最適の医療

薬用酒アラカルト 22 きんかん酒



文と画 薬局 嶋崎 コリカ

またまた、『ひろっば』編集委員、絶賛! 色鮮やかに黄色く完熟したキンカンを使って、さわやかなお酒を作ってみました。



材料は今回もまた近森理事長が日曜市で購入したものです。キンカンはビタミンCが非常に豊富で、強壮、健胃、整腸、動脈硬化、美容などに効果があるといわれています。

<材料>(密閉容器 1L分)

キンカン 約 400g
ホワイトリカー 約 600ml

<作り方>

- ①キンカンは水洗いし、よく水気をふき取る。
- ②そのまま容器に入れ、ホワイトリカーを注ぐ。
- ③1ヵ月目ぐらいから、飲めるようになる。3ヵ月以上熟成させると香りも味も良くなる。

漬け込んでから約一ヵ月後、ひろっば編集委員による試飲会を行いました。「柑橘系のさわやかな香り」、「キンカンの天然の甘さ」、「スーッと喉に入っていく感じで、飲みやすい」などの感想とともに、次々におかわりの声!

漬かっていたキンカンの実も食べてみましたが、ほろ苦さの中に、十分にキンカンの甘さと香りが残っており、こちらもおいしくいただくことができました。容器はすっかり空です。

ストレートでも、ロックでも、また、炭酸で割ったり、お湯で割ったり、いろいろな楽しみ方ができると思います。編集委員一同、お勧めのお酒です!

を実践するために、それぞれが専門職として責任をもってチーム医療に参画するという立場からもさらに精進し、レベルアップを図って欲しい」と、現場スタッフへエールを送っておられる。

日々の業務に追われるばかりでも、こういった実践発表のチャンスを活用すれば着実に実績が残る、と現場では各自やる気を新たにしているようだ。

第7回

米国研修のエキス

入江博之部長率いる心臓血管外科チームのメンバーを中心とした各専門職の皆さんが、4月29日から12日間の米国研修で、各専門職と個別に対応、意見交換するなど、母国語の違いをあまりハンディと感じない濃密な研修ができたそう。達成感の大きさが際立つ研修だったようで、例年の米国研修に増して実りが多かったと、参加者それぞれから「各自の体験のエキス」が寄せられた。



AATS 会場でご一行様記念撮影。左から要医師、上原看護師、入江部長、梅原臨床検査技師、橋本臨床工学技士

看護師の専門性を問う

CCU 看護師 上原 美由紀

参加する以上は「楽しみながら色々経験したい」と自分なりの目的を用意しました。

さて、フロリダ病院では各職種に分かれての見学で、私は看護師として初めて手術から手術直後の看護まで、一連の流れをもって見学するという貴重な経験ができました。術中には入江部長から説明を受けられるほどそうなのかと思うことが多々ありました。

集中治療室 28 床は全て個室、患者一人に看護師一人体制のためか、術後の患者が次々運ばれてくるにも拘わらずゆったりと看護できているなという印象でした。

日米では看護師のシステムがやはり異なり、与えられている業務権限の違いはありましたが、術後の看護・管理に大きな違いはありませんでした。米国人の国民性もあるのでしょうかどの職種も皆フレンドリーで気軽に声をかけあい、また患者一人の治療にチームで動いていると実感しました。

当院も負けず劣らず色々な職種のスタッフがおり専門性を活かしながら治療に当たっています。その象徴のように今回の遠征メンバーは「心臓」に関わる職種が集まりました。色々な角度からの意見が聞きたいへん勉強になりました。看護師の専門性とは何か改めて考える機会になり、自分はなにが提供できるかを考え、よい関係を治療の中で築いていけたらとも思いました。

より良いチームの秘訣

臨床検査技師 梅原 加奈子

病院で私は主に超音波検査技師のエミーという女性と一緒に行動でき、日常の検査の流れを知ることが出来ました。

近森病院と決定的に違っていたのは超音波検査技師が経食道エコーに入り医師とコミュニケーションを取っているところでした。白板で当日の手術予定を確認し、経食道エコーがある手術室に準備に行くというシステムで、経食道エコーは同じ時間帯に幾つもの部屋で準備されています。最初は開胸前に医師と確認し合いその後は気にな

ることがあれば手術室から電話が来るという仕組みです。医師と超音波検査技師が対等に話し合えるということは、より良い医療チームの秘訣だと思います。私自身も日々努力を怠らず新しいものを取り入れて勉強していくことが必要だと感じました。

現地の病院では各技師が専門分野を持っており、個々の専門性がすごく高くなると思いました。近森病院では技師は様々な分野に関わりますから色々な勉強ができるのですが、考え方も様々だと思います。米国の文化に触れ日本の良さ、改善したら良い点なども見つかりました。たくさんの経験を積み、どんどん進んでいきたいです。

近森医療の確かさの実証

循環器科医師 要 致嘉

駆け足でしたが、まさに米国における臨床と研究の両面を垣間見ることができたように思います。具体的には、フロリダホスピタルでは「君はどう思う?」「君ならどうする?」「日本の医療はどうなんだ?」といったことを熱心に質問されました。アメリカは多国籍国家です。「自分が何者であるのか」「あなたは今、何を考えているのか」といったことを、常に確かめ合っているのです。チーム医療の重要性が謳われている今、「言葉をかけ合う」といった、当たり前前ことを、彼らはごくごく自然に実践しているようでした。

それは、胸部外科学会に参加した時も感じました。意見を活発に交換しながら、事実を可能な限り客観的に捉えようとしていました。また、旅行中にはいろんな出会いもありました。ワシントン D.C. ではタクシー運転手のピーターと知り合いになり、彼から「言葉は力、コミュニケーションはエナジーだ」と教えられました。

学会の合間に、アーリントン国立墓地を訪ねた時には、「Ask not what your country can do for you, ask what you can do for your country.」という言葉に出会いました。そう、第 35 代アメリカ合衆国大統領ジョン・F・ケネディが大統領就任演説に用いた言葉です。「国家があなた方に何をやるかではなく、あなた方が国家のために何が出来るかを問いかけてもらいたい」というあの名演説の一文です。今回のアメリカ遠征を通し

て、「僕たちはもっと自分たちのことを知らなくてはいけない」と感じました。その上で多くの人と意見を交換し「近森病院の行っている医療の『確かさ』を実証してはいけない」と感じました。ジョン・F・ケネディの言葉を借りるなら「今、一度、近森会の一員として、自分に何かできるのか問いかけてみる必要があるのでは」と。

最後に、アーリントン国立墓地を案内してくれた日本人ガイドの中村さんが、「ケネディの言葉は、実は米沢藩主・上杉鷹山の言葉なの。日本人はとても賢いのよ」と話してくれました。ちょっぴりうれしくなりました。そんな、たくさんの出会いと発見があったアメリカ遠征でした。

F. ケネディの演説の意味

臨床工学技師 橋本 将幸

施設内のスペシャリストを僕達のために紹介していただき、贅沢な個別の研修となった。僕は手術室に勤務しているので、手術室内で人工心肺業務を主に見学した。この業務は使っている機械の違いがあるものの手技的には自分がやっていることと大きく変わりが無いように感じ、今まで近森病院でやってきたことが通用するんだと少しだけ自信がもてた。ただ、人工心肺担当者の機械操作の正確性、手術の流れでの臨機応変な対応など、自分は未熟であると痛感した。

WashingtonDC では AATS という世界規模の胸部外科学会に参加した。世界中から約 3000 人が参加したらしい。この学会で世界の医療を発表・議論する場や日本ではまだ認可されていない最新機器を目の当たりにすることができ、興味を持てた。

また、スミソニアン美術館、リンカーン記念塔、アーリントン国立墓地など主要な観光地の見学も圧巻だった。そのなかでもとくに、F・ケネディの大統領就任演説の最後の一文が自分の印象に強く残った。なぜなら、この言葉はどんな環境でも応用できると思ったからだ。僕自身に置き換えて考えてみると、まわりが何をしてくれるかではなく、個人で何が出来るか、何をすべきかということを考えようということになる。未熟な自分が大きな刺激を受け、忘れることのできない多くの経験ができました。

患者さんと一緒に 新たな希望を紡ぎたい



織田信長が有名だが、織田靖史さんの場合は「おりた」と読む。瀬戸内海を中心に活躍した村上水軍の、いかにも末裔!らしい堂々たる迫力!!に、一見満ちている!

山内作業療法室長は「身体でぶつかるのが彼のトレードマークだが、反面実によく考えていると感心させられることも多い」そうだし、連携を取ることの多いデイケアパティオの岡村主任は「真面目過ぎ。周りをヤキモキさせるほどシャイで一徹」とも評している。

ゴツゴツしたジャガ芋みたいな素朴さや温かさに救われるのは患者さんばかりでなく、同僚もきっと同じなのだろうが、織田さんは「笑わせるより、笑われる!」という気持ちでグループ療法に当たり、「自分という触媒によって患者さんにどんどん変わってってもらいたい」と、当面の目標を熱く語る。

高校時代の恩師が広島大学の哲学科の出身で、大学受験の際「大股開きに耐えてさまよえ!」と、何やら謎かけのようなハツパをかけてくれたことや、その恩師の存在自体にも感化され、「言葉の意味はよう解らんでも何か伝わってくるものがある…。これが哲学ではないか…」と織田流解釈で哲学を志す。「しかし哲学研究者にはなりたくない。もっとナマの感覚が欲しい」などと悩むようになり、それが初めにも書いた方向転換のきっかけにもなった。

柔道も相撲も部活でやり、大学ではアメフトに燃えていたが3年次に大怪我を経験し、当時のアメフトの監督が岡山県立岡山病院の精神科のドクターで、たまたま「選手ができないのならトレーナーでもやってみるか!」と勧めてくれたのが、また新たなきっかけにもなり最終的には作業療法士に落ち着いた。

大きな身体に癒し系の優しい雰囲気、いかにも体育会系なのに、青春時代を振り返れば「井戸掘りを繰り返しながら生き方を模索してきたように思う」と総括する悩み多き青年だった。

つまりこれまでのさまざまな出会いが結局は現在の仕事に繋がる大きな渦のなかにあったような、少し大袈裟に言えば運命的な力に導かれていま、生き方に悩む患者さんたちとの空間を、共に生きているように見える。

彼のエネルギーが今後どういう方向に向かうかは未知数だが、控えめでも内面体温のたいへん高い彼の情熱が、患者さんたちに何らかの生きる希望を灯していることは確かなようだ。



イラスト ● かなえ

「理学療法士及び作業療法士法」で定められた国家資格である作業療法士は、その第2条2において、作業療法を「身体又は精神に障害のある者に対し、主としてその応用的動作能力又は社会的適応能力の回復を図るため、手芸、工作その他の作業を行なわせることをいう」と規定されている。

つまり、患者さんの「社会的適応能力の回復を図る」のが作業療法士の専門性といえるのだろうが、ことさらにこの専門性を強調するのはには訳がある。織田さんが岡山大学人間学科で哲学を6年かけて学んでいたのに方向転換し、作業療法士の専門学校に入り直し、しかし結局は大学時代の専門である「人間とは、生きるとは、自分とは」といった哲学の課題に辿り着き、「いま実は方向転換したわけではなかった、と実感している」という話に繋がるように思えるからである。「関わり」について追求している現在の自身の仕事のことが、寝ても覚めても頭から離れないようで、「趣味は仕事で仕事も趣味のひとつ」だと思えるのだから、本人にはこんな楽しいことはない! 毎日なのだ。



わたしの師匠です

老健いごばち
廣瀬久代

19年前に91歳で亡くなった私の祖母です。

子どもの頃は写真に写っているこの縁側で祖母の横に腰かけてよく話をしました。畑仕事の最中に祖父が入れ歯を外して木の枝に置いていたらカラスがくわえて行った話や、若い頃に見た仙人のような幽霊の話を、「ほんとに?」と何度も繰り返しながら、真剣に聞いていたものです。

派手なところはひとつも無い人でしたが、ユーモアがあって優しく強い人だったように思います。だからでしょうか、思い出すたび、いまでも「わたしの師匠だったなあ」と感慨深いものがあります。





橋本 恵子

はしもと けいこ①神経内科医師②京都市③愛知医科大学④生まれは京都ですが、育ちは高知県です。中高生時代は陸上長距離部でした。瞬発力より持久力のタイプです。皆様にはたくさんお世話になることと思います。私にとって最速でつとめていきます。お力添えお願い致します。

● 6月の歳時記 ●

あじさい (アジサイ科アジサイ属)

放射線科外来

文 重森静子 画 坂田加奈

梅雨から夏にかけて咲くあじさい。『七変化』といわれるように咲いているうちにだんだん色が変化していく。花ことばは『移り気』。こんなに雨とマッチする花もない。こんもりとまん丸に、まるで手毬のよう。色彩豊かで、この季節、人の目を引き楽しませる。

ある晴れた日、公園の片隅に少し淋しそうでやさしく、何か訴えているかのようなあわれに、やつれ、赤茶けた、額紫陽花に足が止まる。

水分補給を待ちわびるこの花に、心引かれて雨よ降れ。早く元気になあれ。



図書室便り (管理棟図書室 4月受入分)

- SPINAL TRAUMA Imaging, Diagnosis, and Management / ERIC D. SCHWARTZ (他編集)
- The ADULT HIP SECOND EDITION VOLUME 1.2 / JOHN J. CALLAGHAN (他編集)
- DISORDERS OF THE Shoulder Diagnosis & Management Second Edition Volume 1.2 / JOSEPH P. IANNOTTI (他編集)
- 外科病理学 第4版Ⅲ / 向井清 (他編集)
- 第37回日本看護学会論文集 (看護総合・成人看護Ⅱ・小児看護・老年看護・精神看護・看護教育) / 社団法人日本看護協会 (編集) 《寄贈本》
- MINERVA 福祉ライブラリー 14 介護・福祉のための医学概論知っておきたい基礎知識 / 片山哲二
- 改訂 社会福祉士養成講座 9 社会福祉援助技術各論 1 / 福祉士養成講座編集委員会 (編集)
- 肝臓 11, 12, 15, 23(1-6), 26(1-6), 33(7-12), 29(1-6) (1980-1988)
- ACTA PATHOLOGICA JAPONICA 19-22, 39, 40, 42, 43 (1969-1993)
- 月刊社会福祉: クリップライブラリー 174-183, 185-229 (2001-2005)
- Facilities Net: 社会復帰施設と生活支援 2(1, 3, 4), 3(1-4), 4(1-3), 5(1-3), 6(1-3), 7(1, 2), 8(1-3) (1998-2005) 《別冊・増刊号》
- 別冊 整形外科 No.51 整形外科 office-based surgery-1 人でできるテクニック / 高岡邦夫 (編集)
- 別冊 医学のあゆみ 呼吸器疾患 -state of arts Ver.5 / 北村諭 (他編集)
- Rp. レシピ the journal of recipe 2006 年 8 月臨時増刊号 処方せん鑑査・疑義照会実践トレーニング 3 / 澤田康文
- 別冊 NHK きょうの健康 検査でわかること 健康診断ガイドブック / 奈良信雄 (他著) 《ビデオ・DVD》
- Audio-Visual Journal of JUA vol.13 No.2 / 日本泌尿器科学会 (監修)

4月の診療数	近森会 外来患者数	18,634 人	企画情報室より
	近森会 新入院患者数	851 人	
	近森会 退院患者数	845 人	
	地域医療支援病院紹介率	86.54 %	
	近森病院 平均在院日数	14.69 日	
	近森会 平均在院日数	22.21 日	
	近森病院 救急車搬入件数	425 件	
	うち入院件数	220 件	
	手術件数	332 件	
	うち手術室実施	237 件	
全身麻酔件数	141 件		

編集室通信

▼先日図らずも珍しい石ができてしまって、当院で全麻の切石手術を受けました。患者の身になってみると、二泊三日の入院でも頭のなかは自分のことではいっぱいでした。でもスタッフの皆さんの元気な声に励まされ、明るい笑顔に支えられたと思います。術後初めて口にしたのは重湯だったけど、やっぱり生きてると実感したことでした。お世話になりました。(小)